

学会活動の回顧と展望

引用文献

- 1) 藤井富美子：第 20 回被服整理学夏季セミナー講演要旨集，75-86 (1987)
- 2) 水野上与志子：学会活動の回顧と展望：被服整理学部会，家政誌，**39**，451-453 (1988)
- 3) 阿部幸子：第 30 回被服整理学夏季セミナー講演要旨集，1-12 (1997)
- 4) 片山倫子：第 30 回被服整理学夏季セミナー講演要旨集，60-63 (1997)

(文責：田川美恵子)

民俗服飾部会

当部会は昭和 43 (1968) 年民俗服飾研究を志す有志が小川安朗前部会長を中心に「民俗服飾研究委員会」として発足し，「地域に発生し，その地域に対応して発展した特色ある服飾を訪ね，その実態をその背景と共に考察する」意図のもとに，国内外のフィールドワークを実施し研究成果を発表してきた（家政学雑誌 (1969) Vol. 20, No. 2）。

今般の報告は 1988～1997 のものであるが前期 (1970～) の事業が部会の土台であるため，概要を挿入する。

1. 活動経過 (1 期・2 期)

(1) 1 期 (昭和 45 (1970)～60 (1985) 年)

部会長 小川安朗。

A：調査研究旅行地，B：研究発表題名，氏名は省略。

1) 昭和 45 (1970) 年

A 東北，B アンデスの原始紡織・大原女衣裳・南部家伝来衣裳・伊達家服飾・山陰緋・秋月家陣羽織・南海諸島の服飾・飛鳥の漁衣。

2) 昭和 46 (1971) 年

A 山陰・山陽，B 関東水田地帯の作業着・旧家の民俗服飾・沖縄の服飾・宇和島の服飾。

3) 昭和 47 (1972) 年

A 中部，B 結城紬，大島紬・海女の衣服・米琉緋，南部家衣裳，伊予緋。

4) 昭和 48 (1973) 年

A 東北，B マヤの民俗服飾。

5) 昭和 49 (1974) 年

A 関東，B インドネシアの服飾・筑豊炭田の労働着・フランスの民族服。

6) 昭和 50 (1975) 年

A 新潟，B ボリネシアの服飾・新潟県の服飾・ブローニュのかぶりもの。

7) 昭和 51 (1976) 年

A 中央アジア・北九州，B シルクロードの服飾・九州の服飾。

8) 昭和 52 (1977) 年

A 京都，B アフガニスタンの服飾，京都の服飾。

9) 昭和 53 (1978) 年

A 四国，B イラン，トルコの服飾・ギリシャの服飾・四国の服飾。

10) 昭和 54 (1979) 年

A 南太平洋・岡山，B エジプト，ギリシャの服飾・岡山の服飾・中部地区労働着・九州地区の労働着・昭和村の苧麻・甑島の衣料。

家政学会は昭和 54 (1979) 年に研究制度に改革があり，民俗服飾部会と名称が変更になった（会員 104 名）。

11) 昭和 55 (1980) 年

A 東北，B 南太平洋地区の服飾・東北地区の服飾・イラクのアバーヤ・台湾ヤミ族の服飾。

12) 昭和 56 (1981) 年

A 関東・モロッコ・チベット，B チベットの服飾・関東地区の服飾・明治大正期の衣服模様の象徴性・タイ高地の民族服・ウルムチの服飾。

13) 昭和 57 (1982) 年

A 北海道・シルクロード，B シルクロードの服飾・幼児服飾の文化変容・雪袴。

14) 昭和 58 (1983) 年

A 中部・台湾，B 台湾原住民の服飾・中部地区の服飾・京都のたちかけ・甲津原衣裳・雲南の背被・樺太アイヌのイラクサ・モンゴルの服飾。

15) 昭和 59 (1984) 年

A 南九州・メキシコ・グアテマラ，B 南九州地区の服飾・チベットの服飾・服飾の地域性。

16) 昭和 60 (1985) 年

A 佐渡・ペルー・ポリビア，B ペルー，ポリビアの服飾・佐渡の服飾・露卯下駄・浜ハッピー・会津ドモコモ・アルメニアの手芸。

17) 昭和 61 (1986) 年

A 近畿，B 世界の木綿・近畿の服飾・新潟県の服飾・岩城の紺型・群馬の中野緋。

以上発足後 17 年、数名の会員から 125 名に増え、フィールドワークは国内（北海道 1，東北 3，関東 6，近畿 3，山陰 1，四国 1，九州 1）計 16 回，外国（アジア 4，他 4）合計 24 回となる。研究発表も 87 題の成果をおさめた（以上論集第 2 集に収録）。

（2）2 期（昭和 61（1986）年～）

部会長 徳永幾久。

昭和 61（1986）年 11 月，部会規則改正により 2 代部会長徳永幾久となる。第 1 期時代の成果をふまえ，民俗服飾の生成，その要因，存在理由，変化の要因と条件，生活的背景，その優位と必要性，さらに歴史・地理，政治・経済などの条件を組みあわせ，家政という営みとの関連のなかでさらに考察をすすめるべく構想を新たに構築したのである。

そこで今までの結果を整理すると共に，調査研究の目的をしぼり，年次の研究発表は「研究論集」として刊行することとした。刊行誌は「民俗服飾研究論集」とし，将来の完成目的とする「民俗服飾学」の礎石にしたいと考えたのである。次に論集の内容を列記する。

〔第 1 集・昭 61（1986）〕（所属は省略）

印度の野蚕 石橋 裕，連島綿 小野恵利子，三河木綿 沢野幸子，福野綿 森田すみ，岡山の織物 富気久江，作州緋 佐藤早苗・岡野和子・樋口富枝，新潟の織物の盛衰 山崎光子，会津木綿 門馬寿子，地方木綿と上方木綿 徳永幾久，館林綿紬 湯浅絢子。

〔第 2 集・昭 62（1987）〕

アパカとピーニャ 石橋 裕，藤布織の作業工程 山崎光子，北海道の麻事業 福山和子，眞岡木綿 湯浅絢子，松阪木綿 森田すみ・若山 節，昭和から戦中迄の山形木綿 徳永幾久，ブータンの服飾 小川安朗，村山大島紬・信州紬 岡野和子。

〔第 3 集・平 1（1989）〕

奈良晒 森田すみ・若山 節，宮津市上世屋の藤織り生活史 山崎光子，関東の木綿・筑波緋 湯浅絢子・石井早苗，文様生成の一考察—中国の幼児服 徳永幾久，東スンバ・ラジャ・カブンドゥク葬儀の染織と文様 小川由香，アラスカのエスキモーの服飾 小川安朗。

〔第 4 集・平 2（1990）〕

大島紬の現状 辻田可代，山陰の藍染 徳永幾久，井波の絹業 森田すみ。

〔第 5 集・平 3（1991）〕

打毬の装束 平山 貞，水野家打毬の籠手 徳永幾久，福光の麻 森田すみ・若山 節，ドロ神父の授産

活動 矢野道子，湿田の作業着 徳永幾久，服飾様式の変容と文化領域 山崎光子。

〔第 6 集・平 4（1992）〕

前だれ考 徳永幾久，衣料原料イラクサ 村田陽子・遠藤時子，能登上布 森田すみ・若山 節，播州織 辻田可代，仙台染型紙 石川妙子・須田佳子，バリ島の市松文 徳永幾久，韓国の服飾文 金 明姫。

〔第 7 集・平 5（1993）〕

浅舞絞り 徳永幾久，宮城染型染 石川妙子他，学童衣服の緋 高島 愛他，中国地区の麻 清尾清子他，近畿の麻 森田すみ他，水郷の労働着 中村紀子他。

〔第 8 集・平 6（1994）〕

東北の特殊衣料 徳永幾久，三国のサツクリ 山崎光子，会津山袴の呼称 佐々木長生，岩手の麻 村田陽子他，四国の麻 妹尾清子，万祝の発生 矢萩昭二。

〔第 9 集・平 7（1995）〕

山里の型紙 矢萩昭二，秋田・山形の麻 村田陽子・遠藤時子，青森の麻 村田他，特殊織物 藤弘洋子。

〔第 10 集・平 8（1996）〕

御用留からみた服飾 石川妙子，曙染と臙染 徳永幾久，岡山の麻 妹尾清子，福島県の麻 村田陽子他，高瀬絞り 藤弘洋子，会津湯の入仕事着 佐々木長生。

以上第 10 集までの論誌をまとめるなかで，より専門的に特色を研究する目的で，文様・材料・技術などの小グループが誕生した。その結果同項目の地域関連の発表や仲間意識もみられ，視点の総合性も出てきた。

2. これからの展望

本年家政学会は設立 50 周年を迎える記念の年である。そして，当部会も発足して 30 周年になる。これを機に第 1 期のフィールドワークによる研究資料探索の時代の成果，すなわち国内ばかりでなく，外国，特にアジアを主として，材料・色彩・形態・着装など地域に対応した服飾の生態を研修，さらに日本各地の服飾調査では，地域委員が先導し，会員が同じ目で検討考察する態度が作られてきたのである。第 2 期はその蓄えられた力と資料を基礎として，さらに資料の不足な部分をフィールドワークで補足しながら，また資料の整理に力を入れながら報告文をまとめることに努力してきた年月であった。

そこでこの記念すべきときを契機に，会員はさらに奮起し，会員の切なる希望であるまとめの冊子の出版を計画し，出版委員と地区委員が，内容項目その他について目下構想中である。書名はまだ夢であるが「民俗服飾〇〇〇」とし，文化圏別に日本をわけて 5～6

学会活動の回顧と展望

巻としたい希望である。どこまでも民俗という生活文化にこだわり、人間の生命の再生産にかかわる伝承的な行動様式を象徴する服飾に目をむけ、民俗服飾の意味づけとその実態の解明を試み、衣服が変様しつつ生

活化する民俗服飾を明らかにしたいと思っている。

なお構成員は現在、会長1名、副会長3名、会員105名、顧問1名である。

(文責：徳永幾久)

住 居 学 部 会

家政学会の40周年記念事業がおこなわれた昭和63年を最後に、住居学部会も新たな活動期を迎えた。バブル景気を背景に新たな気持ちで迎えた平成時代であったが、バブル景気崩壊に続く低経済成長、高齢社会の到来などにより、多くの社会的、経済的な問題をかかえ、国民の住生活に大きな不安をもたらしたまま、10年が過ぎようとしている。この間の住居学部会の動きを、年次を追ってまとめると、以下のようになる。

1. 住居学部会の動向

(1) 昭和63年度(1988年)

部会長 吉野正治、事務局 吉見静子。日本女子大学にて5月29日に開催。

家政学40周年の年であるこの年度は、これまでの10年間のシンポジウムでおこなわれた内容を検討した結果(家庭科教育における住居学、マンション管理の問題、高齢化社会の住環境整備など)、これまでとは違った観点であるインテリアデザインがテーマとしてとりあげられ、「インテリアデザインの現状と問題点」について、北浦かほる氏(大阪市立大学)による講演がなされた。

日本におけるインテリアデザインの歩みを4段階に分け、インテリアデザインが重要になってくる課程を説明すると同時に、問題点が指摘された。特に老人問題・単身赴任・集住化などにみられる今日の人間関係、住まい方の変化をどのようにとらえ、それをいかにインテリアデザインに表現するかが今後の課題であると結ばれた。

次に「暮らし方の思想をとらえてインテリアデザインがなされねばならない」という北浦氏の意見を受け、それを実践している佐々木恵子氏の作品が吉見静子氏(岐阜女子大)により紹介、説明がおこなわれた。

(2) 平成元年度(1989年)

部会長 西村一朗。東京家政学院大学にて5月28日に開催。

「生活の質と住居(21世紀をめざして)」というテーマで、岸本幸臣氏(大阪教育大)による講演がなさ

れた。講演者の岸本氏は、日本住宅会議で活躍されていることから、現実には生じている住生活領域における矛盾点(住環境の人工化・設備の自動作動化・個別空間の充実化など)をとりあげ、その改善の必要性、背景などを事例をあげながら、「これからの住生活は、これまでの科学技術のトレンド型発展の志向上に追究するのではなく、目的意図的に、自己制御発展の志向結果として追究されるべきである」と述べられ、さらに「住居学研究は、これらの視点にたって生活の場での点検および開発の領域へのフィード・バック機能が求められており、ルーチン型研究より科学革命的研究が重視されているのではないかと、住居学研究の方向性について言及された。

(3) 平成2年度(1990年)

部会長 西村一朗。福岡の中村学園大学にて5月25日に開催。

家政学会大会の前日に講演会と懇親会がおこなわれた。

講演会は「21世紀へ向けての人間関係(家族および地域)の変容と住まい」のテーマにもとづいて、2人の家政学分野以外の専門教育者によって講演・討議された。延藤安弘氏(熊本大学工学部・建築学)は、スライドをとおして、長年調査研究を継続しているコーポラティブ住宅づくりとその間での人間関係の発展について述べられた。一方秋山俊夫氏(福岡教育大学・心理学)は、臨床心理学の立場から症状を持つ児童と普通の児童とによる家の把握の違いを、絵の事例から分析、追究し、臭い付け行為によって領域確定がはかられていることを示唆された。

上記講演の後、住居学部会としてははじめての懇親会が開かれ、部会員間の交流が図られた。

(4) 平成3年度(1991年)

部会長 峯 成子。実践女子大学にて5月26日に開催。

松本恭治氏(国立衛生研究所所長)による講演。